

アグレッシブなロメオ

猫大好き野郎

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

フェアリーテイルの魔導師マカオ・コンボルトの息子ロメオ・コンボルト

彼は本来の歴史より少し…いやかなりアグレッシブだった。その違いがどれほどの変化をもたらすのか。

「俺は絶対強くなる!!？」

6 話
5 話
4 話
3 話
2 話
1 話

--	--	--	--	--	--

41 32 24 15 6 1

目次

1話

「ねえーとーちゃん」

「ん？」

「俺もとーちゃんみたいなスゲー魔導師になれるかな？」

「つたりまえだ！なんてつたつて俺の息子だからな！頑張ればできる！」

「うん！」

ある親子のごく普通の日常。それがたった一つの些細な変化で、とてつもなく大きな変化が起きてしまう。

「オメーの親父、本当にツエーのかよ？いつも酒場で飲んでるじゃんか」

「そーだぞ、実はメチャ弱かったりして」

「アハハハハ！」

「笑うな！とーちゃんはスツゲー魔導師なんだぞ！」

「じゃあ証拠みせてみるよー」

「見せてみるよー」

「今にみてろよ！」

自身の誇りである父を貶され頭に血が上りとつきに買ってしまったケンカ。本来ならばここで父にすごいクエストに行ってもらいに走って行くのだが：彼は本来より少しアグレッシブだった。

「オラア！」

「グヘツ！」

「何するんだよ！」

「俺が強いからとーちゃんも強い！」

「なんだよそれ!?？」

「うるせえ！食らえ！」

父の強さを証明するために自ら戦いを挑んだ。そして：

「ハアハア……」

「やつと倒れた……」

「こつちは5人掛かりだぞ……」

「何てヤツだよ……」

「くそツ、口が切れた……」

敗れてしまった。流石に数が違いすぎた。子どものケンカは力より数なのだから。

「ほらな！お前もヨエーからお前の親父もヨエーんだよ！」

「……」

彼は立てなかった。何度も立ち上がろうとしたができなかった。心が折れてしまったから。

「アレ？ナツ、あそこに寝てるのってロメオじゃない？」

「お？本当だ。てかなんで道の真ん中で？」

「バカ！倒れてるのよ！そんなことより早く助けてあげないと！」

「そ、そうだな。ロメオ、どうした？！」

「…ナ、ナツ兄…」

「大丈夫か？！何があった！」

「…俺…悔しい」

「！！？」

「…とーちゃんのこと…バカにされたのに何もできなかった…」

「！！？」

「…強くなりたいよ…ナツ兄…！！？」

「…そうか」

ナツはそう言うのと優しくロメオを抱き上げギルドへ走って行った。

「じつちゃん！」

「なんじゃあ、騒々しい。また、お前宛に被害届がでとるぞ！」

「そんなことより治療を頼む！ロメオが！」

「ロメオじゃと？…!!？誰にやられた？」

「ケンカらしいんだけど、相手が多かったみたいだよ」

ハッピーはナツが走り去った後、目撃者がいないか探し回っていたのだ。

「ロメオがどうかしたのか!!？」

「マカオ…」

「!…こんなにポロボロに…誰にやられたんだ！知ってんのかハッピー！」

「近所の子どもたちだよ。5人とケンカしてたみたい」

「5人掛かりだと!!？俺が張り倒してやる！」

「待つんじゃマカオ。子どもの喧嘩に親が手を出しちやいかん」

「だがよお、マスター！」

「…そうだよとーちゃん」

「ロメオ!!？」

「…そんなことしたらとーちゃんがもつとバカにされちゃう」

「俺がバカにされる？」

何故自分が出てくるのかまったく分からず困惑するマカオ

「ロメオはな、マカオをバカにされてケンカを買ったんだ」

「俺のトーちゃんは弱くないって叫んでたんだって」

「そうか…マスター」

「なんじゃ」

「なんかクエストあるか？」

「…ハコベ山でバルカン討伐の依頼がきておる」

「それ、俺が受ける」

「俺も手伝うぞ！」

「いや、いい。俺一人でやらなきゃなんねえ」

「…そうか」

ナツの申し出を断り、マカオは一人でギルドを出て行った。

息子の誇りを取り戻すために。

2話

「…ハッ！」

「あ、ロメオ君目が覚めた？」

「ミラ姉…」

マカオがギルドを出る直前に意識を失っていたロメオ。

「丸一日寝てたのよ」

「そんなに!!?」

まさか気を失うとは思いもしなかった、そう考えたとき一つ疑問が生まれた。

「ねえ、とーちゃんは？」

「え…」

「ねえったら」

「…ロメオは仕事に行っただわ」

「なんの!!?」

「バルカンの討伐」

「ハア…なんだ、とーちゃんなら大丈夫か」

そのくらい、とーちゃんなら余裕だよ。しかしロメオの考えは甘いものだった。

「けど、20頭のバルカンを一人で倒さないといけないの」

「20頭?!? 何で1人なのさ!」

「マカオが一人でやらなきゃだめだって聞かなくて」

「……」

俺の所為だ…俺があんなこと言わなかったら…!!?」

「自分を責めちゃだめよ。これはマカオが自分で決めたんだから」

「でも……」

「それでも不安なら自分の出来ることを全部しなさい」

「…うん、わかった!」

ミラの仕事はロメオを慰めること。うんうん、我ながらいい仕事をしたと感心した。しかしミラはロメオの性格を全て理解できていなかった。ミラの言葉でロメオは決心してしまったのだ。

「ナツ兄はどこ?」

「え? ナツなら酒場にいると思うわよ。」

「ありがと!」

くフェアリーテイル 酒場く

「ナツ兄く！」

「ロメオ！大丈夫なのか!!？」

「うん！昨日はありがとう！」

「いいってことよ、気にすんな！」

「で、ナツ兄にお願いがあるんだけどいいかな？」

「ん？なんだ？」

「俺に魔法を教えてよ！」

「マ、ホ、ウく!!？」

ナツはまったく予想していなかったお願いであった。てつきりマカオを助けてって頼まれると思っていた。

「うん！とーちゃんが帰ってきたらビックリさせてやるんだ！」

「そういうことか、任せろ！」

「やった！」

「早速特訓だ！表に出ろ！」

「うん！」

二人はノリノリでギルドから走って行ってしまふ。

「元気ねえ、あの二人」

「あい、それがフェアリーテイルです」

くギルド裏の空き地く

「んじゃ、取り敢えず火出してみろ」

「え？」

「火を出してみろって」

ロメオは失敗したと痛感しナツは人に教えるのが上手く無いと直感した。しかし頼んだのは自分、取り敢えずやってみる。

「……うう？」

「違う違う！もつと体の底からガアーツて感じだよ！」

意味不明である。

「ガアー！」

ボウ！

「それだ！」

「でっ、出た！」

何故出てしまうのか、もつと意味不明である。

「お、マカオと同じ紫パープルファイアの炎か」

「やっぱりこの色が好きかな」

「よーしもつと行くぞー！」

「おー！」

ボウ！

ボウ！

ボウ！！？

「その調子だ！」

「ウリヤア！」

ゴオ！！？

「はあはあ、もう、無理……」

「しゃあねえなあ、ほら」

ボツ！

「なに？」

「喰え」

「……へ？」

「喰ったら力が湧いてくるぞー！」

そんなわけは無い。それができるのは滅竜魔導師の人間だけである。

「じゃあ食べる!…アツツ!!?’」

「やっぱ、無理か」

「分かってたならやらせないでよ!」

涙目で訴える。

「す、すまねえ」

「もう! ナツ兄には頼まない!」

「あつ、おい!」

ロメオが走り去ったあと、しょんぼりしたナツが一人残された。

「取り敢えず紫パルプルフアイエの炎をいっぱい出せるようにしないと」

ボウ!!?’? ボウ!!?’? ボツ…ボツ…ポフツ

「あれ? もう魔力が…」

魔導師の子と行ってもまだまだ子ども。魔力が足りない。

「食べてみるか…いやアレはやっちゃいけない感じがする」

あーでもないこーでもないと考えて、出た答えは…

「魔力だけ吸収する…これだ!」

自分で出した炎を魔力に戻そうとする。が、失敗。

「うーん戻らないなあー」

「どうしたの？」

「え？誰？」

「ああ、ちゃんと会うのは初めてだね。私はルーシイ、よろしくね」

「うん！俺はロメオ、よろしくねルーシイ姉！」

「で、何を悩んでたの？」

「自分で出した魔法を魔力に戻して吸収できないかなって」

「それは、無理かなー」

「どうして？」

「それはとんでもなく難しい技術だと思うわよ。多分ファイオーレでも出来る人はいないんじゃないかな」

「そっか…」

「でも、その考えはいいと思うよ」

「ありがと！ちよつとミラ姉のところ行ってくる！」

「あ、うん、いつてらっしやい…ホントに元気ねえー」

「ミラ姉、ちよつといい？」

「なにかしら？」

「接収テイクオーバーってどうやるの?」

「接収テイクオーバー?」

「うん、どうするの?」

「うーん、ちよつと難しいけど簡単に言うところ…吸収したい相手の魔力を全部取り込むのよ」

「どうやって?」

「まず、相手を弱らせてからこの魔法を使うのよ」

ミラの手から魔法陣が現れる。

「その魔法教えて!」

「ちよつとだけだよ?」

「ありがとう!」

くギルド裏の空き地く

再び空き地に戻ってきたロメオ。ナツはもういない。

「ふー、この吸収魔法を使えば…」

ポツ! シユウ…

「おお、戻ったぞ!!?」

何と、今まで、誰もが、考えた事はあつたが完成まで持つていくことが出来なかつた魔法の使い方を完成させてしまった。

「これなら俺でも戦える!!?」

ゴオオオ!!?

「おっと、火事になるところだった」

危ない危ない、と冷や汗をふく。そして、ロメオはそれから何時間も練習を続けた。

く夜 ギルドにてく

「マスター、みましたか?」

「ロメオの事か?それなら見たぞ。素晴らしい才能じゃ」

「ええ、テイクオーバー接収の吸収の段階まで一時間もたたずに習得しました」

「ほう、一時間か…ギルドの未来は安心じゃの」

「そうですね。次の時代のリーダーになれると思います」

そうして夜は更けていく。

3話

（4日後）

「じーちゃん、とーちゃんは？」

「しつこいのく、まだ連絡は無い」

「だったら捜してよ！」

「やかましい！魔導師の子なら信じて待っておれ！」

「…」

じーちゃんのバカ…！

「ちよつとマスター、言い過ぎですよ」

「かまわん、このくらいがちょうどいいのじゃ」

「…もう、いいよ…」

「なんじゃ？」

「捜してくれないなら自分で捜しに行く!!？」

「ま、まつのじゃ！」

「うるさい！」

「グフッ！」

痺れを切れたロメオは走り出した。止めようとするマスターの顎に鋭い右フックをぶち込みマカオがいるハコベ山へ向かつて。

「ま、マスター!? 大丈夫ですか!?」

「…ムウ、中々いい拳じゃ…」

「そんなこといつてる場合ですか！」

「そうじゃな…ナツ！」

「あ?なんだ、じつちゃん?’

「すまんが、ロメオを追いかけてくれんか?’

「よし!任せろ!’

「オイラも行くよ!’

ナツとハッピーもすぐに後を追いかけた。

「あ、私も行く〜!’

ついでにルーシイも。

「大丈夫でしょうか?’

「なに、彼奴らも手加減くらいできるじやろう」

「ロメオじゃなくて、ナツたちの方です」

「どういうことじゃ？」

「ロメオにせがまれて魔法を少し教えたり、ギルドの書庫に案内して上げたりしたんですよ」

「なんと…」

「そしたら、どんどん魔法をおぼえちゃって。しかも、かなりの腕前ですよ。つい、本気をだしちゃいました」

「…つい、ではすまんじゃろう」

やはり、このギルドには同類が集まるか…

マカロフはまた頭を抱える。

くハコベ山 麓く

「とーちゃん、待つてて！」

絶対に助けにいくから！

「待て!!？」

「ナツ兄!!？それにハッピーとルーシイ姉も！」

「ロメオく戻ろうよ。皆心配してるよ」

「そうよ、マカロフさんは私たちが捜すから！」

それじゃ…それじゃ…

「それじゃダメなんだ!!?」

「!!?」

「俺は！俺が出来る事をやるんだ！そのために、まだ上手くはできないけど魔法も覚え
た。だから…」

「……」

「邪魔するならナツ兄だつてぶつ倒す!!?」

「…そうか」

「ナツ?」

「かかってこいや!」

指先にC O M E O Nと炎を生み出し挑発するナツ。

「行くよ!!?」

「こいや!」

パレブルファイア
「紫の炎!!?」

「火竜の咆哮!!?」

ロメオは最初に比べればかなり大きな炎を生み出したが、ナツはその一回り以上も大
きな炎のブレスを吐き出す。

「どうした！そんなもんじゃねえだろ！」

「くっ、まだまだ！紫パルファイアの炎！」

「きかーん！」

いくら魔法は上達したと言ってもまだまだひよっこのレベル。さらにナツに炎は効かない。

「火竜の鉄拳！」

「グウツ！！？」

「ロメオ！！？ナツ！やりすぎよ！」

ルーシイも流石に子ども相手への威力とは思えない攻撃に口を挟む。

「ルーシイ、少し黙っててくれ」

「でも！」

「これは覚悟と覚悟のぶつかり合いだ。他人が口を挟んじやいけねえ」

「！……」

ナツの剣幕に気圧されルーシイは口を開けなくなってしまう。

「…紫パルファイアの炎」

ボツ

「あ？俺に炎は効かねえぞ」

「…紫の炎」
パープルファイア

ボツ…ボツ…ボツ

「こんなもん喰ってやるよ！」

スウウウウ!!?

「…きた」

「？」

大きく息を吸いロメオの炎を吸い込んで行くナツ。しかし不敵に笑うロメオ。

「橙の炎!!？」
オレンジファイア

「…!!?、臭えエエエ!!?」

炎をドンドン吸い込むナツの目の前にオレンジ色の炎を投げ込んだロメオ。

「橙の炎は強烈な臭いを出す炎! ナツ兄の鼻ならダメージも強烈なはず！」

「ぐ、グオオオオオ…ハナが…!」

「紫の炎拳!!？」
パープルナックル

「カハッ！」

鼻を抑えて震えているナツの顔面に炎を纏った拳を捻じり込む。

「俺だって今まで練習して来たんだ!!？」

「くっ、火竜の咆哮！」

「吸収!!？」

今度はロメオが、炎を吸収する番だった。そして…

「なっ!!？」

「スリープ!!？」

「フニヤッ!…ねみい…zzzzz」

「ナツ!!？」

「はあ、はあ、やった…」

なんとロメオがナツに勝ってしまった。

「嘘でしょ…? ナツがこんな小さい子に負けちゃった…」

「あい、寝てるだけだけどね」

「…はあ…はあ…ルーシイ姉も…邪魔するの…?」

「…!!? 本気なの?」

「当たり前だよ…」

「じゃあ、手伝って上げる!」

「…本当?」

「うん!ね、ハッピー?」

「あい、ナツも負けちゃったしね」

「ありがとうルーシー姉、ハッピー！」

(…!可愛い…いやいや、子どもよ!すっかりしなさいルーシー・ハートファイリア!!?)
笑顔で礼を言うロメオとその笑顔に開いてはいけない扉を開きかけているルーシー。
そして、ニヤニヤするハッピー。

「それ以上はダメだよ、ルーシー」

「分かっているわよ！」

「？」

フェアリーテイルはいつでもどこでも騒がしいらしい。

「さあ、マカオさん捜しましょう！」

「あい！」

「うん！」

「…zzzz」

「…ああ」

すっかり忘れてた。と、全員の心の内がたった一言にこめられて漏れ出てしまった。

「ナツ、どうしよう」

「起こしましょうよ」

「取り敢えず殴れば起きるかな？」

「なんて恐ろしいこと言う猫ちゃんかしら!!?」

「あ、俺起こせるよ」

「なら最初から起こしてよ!」

「ごめんごめん」

眠らせる事ができるのに起こせない訳が無い。もつとも、術者が起こせない危険な魔法もあるが。

「…んあ?…ロメオこのヤロー!!?まだ勝負はついてねえぞ!」

「コラ、ナツ! 暴れないで!」

「そーだよ、どんな形だろうとナツは負けちゃったんだよ」

「あ、俺ナツ兄に勝ったんだ…」

ナツは起きるなり暴れ、ロメオはロメオで今更自らの勝利に気づく。

「まあ、負けたんだ。俺も手伝ってやる」

「うんありがと、ナツ兄!」

今度こそ、本来の目的であるマカオの搜索を始める。果たしてロメオ達はマカオを助けられるのか!

4話

「とーちゃん！」

「マカオー！どこだー！」

「うーんいないわね、と申しております」

「吹雪が強くて空から捜せないよ」

マカオを捜しはじめて1時間近く。山自体は小さくても吹雪が強くて視界がかなり悪い。

「おいルーシイ、寒いなら帰れよ」

「いやよここまで来て帰るなんて、と申しております」

「ていうかその精霊の使い方あつてるの？」

「オイラは間違つてると思うな」

途中から寒さに勝てず呼び出した精霊、時計座のホロログウムの中に避難しているルーシイが…

「ウホッ！」

「キヤア！、と申しております」

「いきなりなんだ!?？」

「ウホツ、いい女」

「えっ? ちよ、まつ、助けてー!、と申しております」

「ルーシイ姉!」

突然現れたゴリラの化け物「バルカン」にルーシイが攫われる。

「待ちやがれ」

「ナツ兄、まって!」

ルーシイはハコベ山の洞窟まで連れ去られ、ホロロギウムは時間通りに帰ってしま
う。

「くっ、主人の危機くらい頑張りなさいよ!」

「邪魔者、いない。オデ、女好き」

「ちよつと近寄らないでよ!」

「ウホホ!」

「やつと追いついたぞ!」

「ウホ?」

「ルーシイを返せ!」

「あと、マカオはどこだ！」

ナツ兄、とーちゃんがついになってるよ…

「ウホ、コツチ」

「なんだ？ 話わかるじゃねえか」

バルカンの言うことをほいほい信じてしまうナツ。

「ココ」

「あん？ なにもねえぞ？ つてウワアア^{!!}？」

「ウホッ、邪魔者一人消えた」

「ナツウウ！」

「ナツ兄！」

そして、谷につきおとされてしまうナツをハッピーが慌てて助けに行く。

「くっ、私だつてやるときはやるのよ！ 開け、金牛宮の扉タウロス^{!!}？」

「ンMO！」

「ウシ邪魔、オデの女！」

「おれの女ですと？ おれの乳とっていただきたい！」

「関係無いでしょ^{!!}？」

精霊を呼び出したルーシイだが呼び出す精霊を間違えたかも、と後悔しそうになって

いる。

「俺もいるぞ！」

「ガキ、もつと邪魔、きえろ」

「ンMO！私もいますぞ！」

「早く何とかして!!？」

斧を構えバルカンに斬りかかるタウロスと炎を生み出し投げつけるロメオ。

「ウホッ、当たらない」

「いちいちムカつくなあ！」

滑稽な動きで攻撃を避け回るバルカンに苛立つロメオ。しかも

「うおりゃ！やつと帰ってきたって

なんか化け物増えてる!!？」

「MO!？」

「それ、仲間！」

タウロスは帰ってきたナツの一撃により撃沈。

「なにしてくれんのよ！」

「悪い、つい」

「ついじゃないわよ！ムキー！」

暴れるルーシイと適当に謝るナツ。

「ウホッ、オデ男嫌い」

「知るか！火竜の鉄拳!!？」

「ウホッ!!？」

「ナイスナツ兄！紫の炎拳!!？」
バルナックル

「ウホホ!!？」

ナツとロメオの絶妙なコンビネーションでバルカンをぶつ飛ばした。

「ウホッ、本気出す！」

「させるか！」

「まってナツ兄！」

「んだよ!!？」

「こいつは俺が倒す！」

「…よし、ぶちかませ！」

ロメオが一人で倒すと宣言しナツが激励を飛ばす。

バルファア
「紫の炎!!？」

「ウホ!!？」

バルファア
「紫の炎包围網！」

「ウホウ！」

ロメオの凄まじい攻撃にバルカンはどんどんボロボロになっていく。

「凄い…」

「あい、あんなに小さいのにね」

「魔法に歳なんて関係無え、有るのは想いの強さだつてじっちゃんが言つてた」

「そこまで、お父さんのことを…」

そしてロメオの最後の魔法が命中して、バルカンが遂に倒れる。

「やったあ!!?」

「あれみて!バルカンの身体が!」

バルカンの身体が光つて姿を変えていく。そしてなんとマカオに変わった。

「とーちゃん!!?」

「マカオ!大丈夫か!」

「バルカンは接テイカオーバー収して生きるモンスターなんだ…」

「…すまねえ…こんな情けない姿を…」

「酷い傷…!」

「とーちゃん!今助けるから!」

「…ロメオ!??…なんでここに…!!?…」

「喋るな!今からちつと痛えけど我慢しろよ!」

「ぬう!グツ!がああああ!!?…」

「とーちゃん頑張つて!」

かなり危険だがナツの炎による止血は効果的だった。

「ルーシイ!包帯!」

「わかつた!」

そしてルーシイの応急手当で何とか一命を取り留める。

「よかつた…とーちゃんが無事で…」

「すまねえロメオ。情けない親父で…」

「そんなことないよ!一人で何匹も怪物を倒したんだから!」

「そうか…今度いじめられたら言つてやれ!お前の親父は怪物19匹倒せるのか!つてな」

「違うよとーちゃん」

「なにがだ?」

今のセリフに何処がおかしいところはあつたのか、と考えを巡らせるマカオを尻目に満面の笑顔でロメオら宣言する。

「お前ら親子は怪物20匹倒せるのか、だよ！」

5話

「グレイ兄、ナツ兄知らない？」

「あ？知らねえよ、あんな暑苦しいやつ」

「そっか…どこ行ったんだろ」

「ナツならルーちゃんと仕事に行ったよ」

「レビイ姉！それ本当？」

「うん、なんでも本を処分するだけで200万Jもらえるんだって」

「に、にひやくまん…」

マカオを助けてから数日が過ぎいつもの日常が戻って来た頃ロメオはナツに魔法を教えてもらおうと思いい探していたのだが、すでにナツは仲間と共に仕事へ出てしまっていて留守であった。

「私もその仕事受けたかったなあ」

「じゃあ、レビイ姉は今暇なの？」

「え、そうだけど…何々？一人前にナンパ？おませさんだなあもう！」

「!!?」

「ち、違うよ！俺は勉強を教えてもらおうと思って！」

「なんだ、勉強か……」

「あんな小さい子どもに先を越されたのかと思ったぜ……」

レビイにからかわれて顔を真っ赤に染めるロメオ。そしてナンパに反応するジエツトとドロイ。

「なーんだ勉強かあ、いいよ教えてあげる。暫く暇だしね」

「ありがとう！」

「どうしたんだ、ロメオ。急に勉強なんて」

「とーちゃんよりスゲー魔道士になりたいから頑張ってるんだ!!?」

「そうか、俺よりすごくなるか！頑張れよ!!?」

「うん！」

そしてロメオはマカオ越えを宣言してレビイと書庫の方へむかうのであった。

「ねえ、ロメオ君」

「なに？」

「ナツに勝ったって本当？」

「うーん……勝ったと思うんだけどナツ兄も油断してたし不意打ちで勝ったみたいだから

なあ…」

「でも、勝ったんでしょ！すごいじゃないナツに勝つなんて！」

「そうなのかなあ…」

今だにあの勝ち方には不満が残るロメオ。やはり眠らせるより正面なら勝ちたいと思っらしい。

「ルーちゃんに聞いたよ、魔法を吸収してねむらせたんだってね」

「うん、テイクオーバー接 収の応用なんだ」

「すごいじゃん！相手の魔法を吸収するなんて！」

「でもナツ兄の魔法を知ってたからすぐに反応できたけど知らない相手だったら上手くできるかどうかわかんないよ」

「まだ小さいんだからそんなに気負わなくても大丈夫だよ。まだたくさん時間はあるんだから」

「レビィ姉…」

「あはは、ガラにも無いこと言っちゃったかな？よしそんなことより勉強勉強！」

「そうだね！それでレビィ姉、この本の文字がわからないんだ、教えてくれる？」

「おつ、この本はくかなり古い時代の暗号だね、この時だけの解読法があるんだよ。この文字が出てきたら手前のこの文字がある所までまで戻って…」

「…すげー」

「えへへこのくらいどうってことないよ」

この後数日間、フェアリーテイルの書庫はレビイとロメオによって占拠されていた。喋りかけようにもかなり集中しているらしく声をかけるのは気が引けるのだ。しかし脚に自信がある男が空気を読まずに話しかけた。

「な、なあレビイ」

「それでここはこうして…」

「そっかなるほど…」

「レビイって…」

「ジェットうるさい！今いい所なの邪魔しないで！」

「わ、悪い…」

レビイに一喝されしよんぼりしながら酒場に帰ってきたそうだ。

「ごめんねーロメオ君。そろそろ仕事に行かないといけないんだ」

「ううん、こつちこそごめんなさい。何日もおしえてもらっちゃって」

「いいのよ、楽しかったしね」

「レビイ姉ありがとう!!？」

「じゃあ仕事行ってくるね」

「うんいつてらっしやい！」

レビイ達のチーム、シャドウギアはこれからしばらく仕事に行く。そして、ロメオは見送りの為に来ていたのだ。

「あ、ロメオくんじゃない、どうしたの？」

「あ、ルーシイ姉お帰り。ナツ兄とハッピーも。レビイ姉の見送りをしてたんだよ」

「へへ、そーなんだ。何、レビイちゃんにホレたの？」

「違うよ！ルーシイ姉までそんなこというなんて……」

「あはははは、ゴメンゴメン。ついね」

そしてシャドウギアと丁度入れ替わる形でナツ達が帰ってきた。

「ナツ兄！俺に魔法教えてよ！」

「おー、いいぞー」

「ありがとう！じゃ、早速……」

「ロメオくん、まだフェアリーテイルには入らないの？」

「何言ってるんだ、もうロメオはいつてんだろ？」

「でも、ギルドの紋章がないし……」

「……忘れてた」

「なにー！まだはいってねえのか!!?」

「ちよつと待つてて！すぐにじーちゃんに言うてくる！」

ロメオは焦つてダツシユでマカロフのところに向かった。

「なにも走らなくてもいいのにな」

「仕方ないよ、凄いい魔導士になりたいのにギルドに入るのを忘れてたんだから」

「俺達も早く戻つて報告しよーぜ！」

「あい」

「そうね」

そしてナツ達もゆっくりとギルドへ戻つて行くのだった。

「なんでさー！いいじゃん別に入つたつて!!?」

「やかましい！ダメなものはダメじゃ！お主にはまだ早い！」

「ナツ兄だつて小さい頃から入つてたじゃんか！」

「あやつは身寄りが無かつたから仕方なかつんじゃ、他の小さい頃に入つてた者も

じゃぞで」

「むう……！じゃあどうしたら入れてくれるのさ！」

「もう少し大きくなったらな」

「なんでさー！」

「くどい！」

マカロフとロメオが大きな声で言い争っていた。

「マスターもロメオもでけえ声だなー」

「そんなこと言ってる場合!!? 止めなくちやー！」

「待つて、ルーシイ」

「ミラさん!でも…」

「マスターはロメオを心配してるのよ、きつと上手く納得させるわ。しばらく見ていましょう」

「…そう上手くいくのかなあ」

ミラの予想は半分当たっていた。マカロフはロメオが心配で危険と判断したからギルド入りを許可しない。しかしロメオがあまりに食い下がるためだんだんと頭に血が上り…

「いいじやろう!!? フェアリーテイルに入れてやる!!?」

「ホント!!?」

「しかーし!条件がある!」

「条件？」

「フェアリーテイルのS級魔導士の半数以上に認められることじゃあ!!？」

「「「S級魔導士の半数!?」「」」」

「そしてその証を示せえ!!？」

ロメオ達の話聞いていた周り人たちが驚く。

「マスター、いくらなんでもそりゃねーぜ」

「そうだ、そうだ。子供相手に大人気ねーぞ！」

「やかましい!!?もう決めたのじゃ!変更は無い!」

「…S級魔導士に認められたら入れてくれるんだね？」

「そうじゃ」

「わかった!ナツ兄!俺もすぐにはいるからね！」

「お、おう、頑張れよ」

さすがのナツもS級魔導士はやバイと感じているらしい。

(さすがのロメオもまだまだ子供じやのう。S級魔導士は全員で5人、つまり3人以上に認められなければならない。恐らくエルザはロメオをみとめるだろう。しかし他の者は…今のところミラは活動しておらんからS級だとはわからないはず。ギルダーツは帰ってこんしミストガンはデイスコミュニケーションのお手本じゃしラクサスはあの

性格…認められる可能性は無い!!?)

マカロフは大人気無くロメオ相手に本気を出していた。

「フフフ…さあロメオ諦めたら「ミラ姉、入ってもいい?」「いいわよ」なにいい!!?」

「よし、後二人」

「まてえい。なぜミラがS級だと

気付いた?」

「え?だって有名じゃん、魔人ミラジエーンって」

「もう、それで呼ばないでよ。昔の話よ」

「ゴメンよ、ミラ姉」

マカロフは忘れていたのだ。ロメオがミラと仲がいい事を。失念していたのだ。行動力を。

「こりゃあヤバイかもしれないなあ…」

6話

「jeeちゃん、すげえ魔法教えてよー」

「ダメじゃ、今から定例会に行くんじゃ」

「帰ってきたら教えてよね！」

「わかったわかった、なんでも教えてやる」

「へへっやったー！」

出発直前にやって来たロメオを適当にあしらい約束をしてしまうマカロフ。

「では行ってくるぞ」

「いつてらっしゃい、お気をつけてくださいいねマスター」

そしてミラにデレデレしながら定例会に向かった。

「ねえ、S級魔導士はまだ帰ってこないの？」

「うーん、エルザならそろそろ帰って来るんじゃないかしら？」

早くギルドに入りたいロメオは毎日ミラにS級魔導士の行方を聞き、ガツクリしながら帰るのをくりかえしていたが初めていい情報を聞けてテンションが上がった。

「本当!?じゃ、誰か換装使える人知らない？」

「換装？ビスカなら使えるわよ」

「ビスカ姉だね？ありがとう！」

「元氣ねえ…」

エルザと聞き、ならば換装について教えてもらおうとしたが最低限使えないといけな
いと思ひ発動はできるようにしたいようだ。

「ビスカ姉！換装教えて！」

「な、なによ突然。エルザに教えてもらえばいいじゃない」

「そうだけど、今はビスカ姉じゃないとダメなんだ！」

「あ、あんたねえ…」

「ビスカ姉？！」

ロメオの意思は伝わるのだが言葉的に問題があり近くにいたアルザックが少々慌て
た。

「いいけど、もう少し言葉を考えてから喋って…」

「え？」

ロメオは天然のようだ。

「まず換装はね、別の空間に保管してある武器とかを手元に呼び出しす魔法なの。例え
ば…家に置いてある剣を山の中で呼び出して使ったりね」

「…ふむふむ」

「それで、何を呼びたしたいの？」

「え？…考えてなかった」

「何よそれ…まあ、とりあえず私の銃かしてあげるから呼び出してみなさい」
「うん！」

ロメオはビスカが呼び出したライフルを受け取りアルザックに渡す。

「え、え？」

「ちよつと持つててアルザック兄」

「う、うん」

突然渡され困惑するも大人しくもっている。

「えつと…どうやるの？」

「銃に自分の魔力をマーキングしてそれを目印に來いつて呼び出すの」

「…來い！」

ポーンッ

「あれ？弾だけ來ちやつた」

「呼び出せるだけでも凄いわ…」

ちなみにビスカは呼び出せるようになるまで時間がかかっていた。

「戻すのは？」

「いっしょよ、戻れってするの」

「戻れ！」

ヒュッ

「おおー」

「…凄すぎるわね」

弾はちゃんとライフルに戻ったようだ。

「今度こそ…来い！」

シユン

「やった！出来た！」

「…天才なのかしら？」

なんと二回のチャレンジで換装が出来てしまった。

「あとは何呼び出すか決めるだけね」

「うーん…」

「焦らずゆっくり考えればいいのよ、呼び出す物は逃げないわ」

「そだね。ありがとうビスカ姉！」

「構わないわ」

次の日フェアリーテイルはいつもより騒がしかった。

「た、たいへんだあ！エルザが…エルザが帰ってきたあ！」

「なにいい！」

…ずん…ずん…ずん、ずん！

「やべえぞ…」

「ああ、やべえ…」

ナツとグレイが顔を真っ青にして震えている。

「エルザって誰？」

ルーシィは周りの慌てように怯える

「エルザってのはフェアリーテイル最強の女魔導士だ…」

「最強？」

「ああ、最凶だ…」

「何か違う気がするんだけど…」

「帰ったぞ」

「エルザさんお帰りなさいませ！」

「お帰りなさいませ！」

謎の連携によるフェアリーテイラー式お出迎え。

「ミラ、マスターは？」

「今、定例会に行ってるわ」

「そうか…ナツ、グレイ、仲良くやってるか？」

「お、おう、俺たち仲良くやってるぜ…」

「あ、あい」

「ナツがハッピーみたい!?」

あまりのキャラの変わり様に驚くルーシイ。

「うむ、喧嘩するのは仕方ないが仲良くしてるのが一番好きだぞ」

「あ、あい」

あのナツが怯える程の人物エルザ・スカーレット。人呼んで妖精女王「テイターニア」

「最強の女魔導士」そして…

「カナ、なんて座り方してるんだ。酒は程々にしろ」

「むう…」

「ワカバ、吸い殻がおちているぞ。ビジター、踊るなら外で踊れ」

「…なんか凄いわね」

「風紀委員」と呼ばれている。

「ん？みない顔だな」

「わ、私この前入ったルーシイです」

「ほう、噂は聞いてるぞ。なんでも傭兵ゴリラを倒したりメイド奴隷を連れているとか」

「なんか色々間違ってるー!!?」

「エルザ姉！」

「お前は…マカオのところの…」

「ロメオだよ」

「そうか。それで、どうした？」

「フェアリーテイルに入ってもいい？」

「なぜ私に言う？マスターに言えばいいだろう」

「じーちゃんがS級魔導師の許可が無いとダメだって言うから…だからお願い許可して

!!?」

頭を深々と下げ拝み倒すようなロメオの突然のお願いにも戸惑うことも無く落ち着いて対応するエルザ。

「ふむ…少し待っている」

そう言つてエルザはナツとグレイの方へ向かった。

「ナツ、グレイ、手伝ってもらいたいことがある」

「エルザが俺たちに頼み!!?」

「ああ、帰ってくる途中に気になる名前を聞いたものでな。鉄アイゼンヴァルトの森のエリゴールと…」

「鉄アイゼンヴァルトの森って言えば闇ギルドじゃないか」

「あい、それにエリゴールは暗殺系の依頼ばかり受ける危ないヤツなんだ」

「あいつら法律無視だからおつかねーんだよなあ」

「ナツがそれを言うんだ…」

「それで奴らが何かを企んでいるように、手伝ってくれ」

「おうよ」

「エルザに頼まれちゃしかたねえな」

「すまないな、明日の朝駅に集合してくれ」

エルザは言うだけ言うと言と踵を返しロメオの方へ戻ってきた。

「またせたな、詳しくきかせてくれ」

「うん。それでね、入るにはS級魔導士の許可とその証が要るんだ」

「証か…例えば?」

「魔法を教えてもらって直接じーちゃんに見せるよ」

「そうか、では教えてやろう。着いて来い」

「うん!」

エルザはロメオを引き連れ華麗に去って行った。

「…とんでもない人ね」

「あい、それがフェアリーテイルです」